

三層構造モデルによる介護技能実習生のキャリア展望
—ベトナム人介護実習生への3年間の聞き取り調査—

**Career prospects for nursing care technical intern trainees
based on the three-layer model
-Three-year interview survey with Vietnamese nursing care trainees-**

富山短期大学 健康福祉学科
小平達夫

**Toyama College, Department of Health and Welfare
KODAIRA Tatsuo**

The purpose of this paper was to clarify their career prospects from the perspective of cross-cultural adaptation using the three-layer structure model, based on interviews with Vietnamese nursing care technical intern trainees. Through interviews with these students over the past three years, it has been shown that they have simultaneously experienced psychological adjustment, sociocultural adjustment, and self-actualization adjustment from the time they arrived in Japan. Therefore, in this case, the three-layer structure model was out of touch with reality. The reason for this is the unique international labor migration system. There is a need for a new model to replace the temporal progression of adaptation assumed by the three-layer structure model, and I would like to present a new model, the "simultaneous cross-cultural adaptation model."

1. はじめに

本稿の目的は、三層構造モデルからベトナム人介護技能実習生のキャリア展望を明らかにすることである。三層構造モデルとは、日本の医療・介護で働く外国人介護士の異文化適応におけるモデルである（畠中他, 2014）（図1）。

まずは、異文化適応に関する先行研究をみてみたい。

Masgoret（2006）は、相手国の語学力、これまでの異文化経験、就職意欲、新天地での活躍への期待が、社会文化的適応に関連し、相手国のコミュニティとの接触が多い傾向にある滞在者は社会文化適応の問題が少ないことを指摘している。Dunbar（1994）は、アメリカで勤務するドイツのエグゼクティブワークカーを対象に日本で勤務するアメリカのエグゼクティブワークカーと比べてビジネス関連の障壁が低く社会文化的適応が高く、キャリア満足度も高いことを指摘している。Masgoret, Bernaus, & Garder（2000）は、スペインのイギリス人英語講師のスペイン語の学習意欲とスペイン文化への適応の関係性を指摘した。

Black & Mendenhall（1990）は、異文化トレーニングが個人のスキルの開発、異文化適応への促進、異文化での仕事のパフォーマンスに良い影響を与えることを示唆した。

Aycan（1997）は、海外の駐在における異文化適応は、仕事と社会文化の両方の適合度に関係している。多面的な現象として、海外駐在員の異文化適応は心理的、社会文化的、仕事の領域で確認できる。このモデルは、心理的および社会文化的適応が仕事の適応に最も直接的な影響を与えることを指摘している。

海外赴任プロセスの成功は、海外駐在員に対する管理の能力やスキルだけでなく、赴任前および赴任中の組織（親会社と現地会社の両方）のサポートにも依存すると主張している。また、本人の文化受容、性格も重要な因子と論じている。適応プロセス全体を捉えるために、心理的適応、社会文化的適応および職業的適応を含む多次元現象として捉えた。海外での駐在員は、精神的ストレスが少なく、新しい文化環境に高度に統合できる限り、新しい仕事に効果的に取り組み、熱心に取り組むことができると言及している。海外駐在員の失敗（早期帰国や不十分なパフォーマンス）は、単にその人の適応能力の無さだけが原因であると考えられるべきではないと論じている。

Searle & Ward（1990）は、社会文化的適応には生活習慣の習得や文化背景の理解、言語能力の向上、受け入れ国の人々の行動様式の学習など、文化学習に関わる要素があることを指摘している。

また、Ward & Kennedy（1993）は新しい環境での状況や日常生活における困難に対して適切に対応する能力に注目している。また、Ward & Kennedy（1993）は、受け入れ国の人々との良好な関係性、言語の流暢さは社会文化的適応と直接的な関係がある。それは、ホスト文化のメンバーとの相互作用の増加と社会文化的適応問題の減少に関連していることを指摘している。

畠中他（2014）は、在日外国人介護福祉士候補生の異文化適応の研究で、候補生の多くは

日本人の利用者や患者との会話に困難を感じたり、日本人スタッフとの会話に摩擦を感じたりしており、ホストの人々と自由に話せていないと思っており、さらに漢字の読み書き、医療・介護用語の理解、就労時間の厳しさ、仕事役割の混乱、高齢患者への対応などに困難を抱えていることを指摘している。

一方、病院・施設では、日本人職員との人間関係での調整の必要性を感じており、緊急時の判断や習慣の違いに対する不安を覚えていると報告されている（小川他、2010）。しかし病院・施設は候補生に対して、語学や国家試験のサポートは行うが、精神面や文化面へのサポートは総じて少ない（古川他、2012；平野他、2010）。こうしたサポート体制の偏りを背景に、現状では候補生との間にある文化差や、候補生の異文化適応適過程への理解が不足しがちとなり、現場の混乱をきたしていると考えられる（畠中他、2014）。

畠中他（2014）は、候補生がケア現場において職業人としての職務を遂行するには、心理的適応、文化学習を伴う社会文化的適応、さらに、職業人としての成長を目指す自己実現的適応が必要と考え、異文化適応の三層構造モデルを提案している（図 1）。このモデルは、留学生の異文化適応の段階的進行を読み解く 5 層構造モデル（田中・松尾、1993）と、適応を心理的適応と社会文化的適応（Searle & Ward, 1990）で二分したものを参考に作成した発展型であり、ケア現場で働く職業人の異文化適応として概念構成している（畠中他、2014）。

このモデルで、下層は衣食住の確保、安定した生存条件、心の健康や精神的安定が保たれた状態【心理的適応】、中層は日常生活と職業生活における文化理解やホストとの良好な対人関係構築、職場での適応を含む【社会文化的適応】、上層はホスト社会での職業人としての有意義感、仕事へのやりがい感、充実感、将来の目標、目標達成意識を得る【自己実現的適応】で説明される（畠中他、2014）。

研究対象である介護技能実習生に三層構造モデルを当てはめて、最上位層の自己実現的適応（仕事へのやりがい感、充実感、将来の目標）に焦点を当てて、キャリア展望を明らかにしたい。

その前に、本研究の今回対象者となるベトナム人介護技能実習生は特色ある国際労働移動システムにより来日しているため、そのシステムに関する説明を行いたい（図 2）。

本研究の対象者は、大阪府にある 3 つの社会医療法人にて組成されたコンソーシアム（大阪 APS コンソーシアム）のプロジェクトにて来日している。当該コンソーシアムがハノイに介護教育施設を立ち上げ、その施設に 3 法人より 1 カ月交代で中堅管理職クラスの介護職員（介護福祉士）を一人ずつ講師として派遣し、来日前の介護技能実習生に介護教育を行っている。介護初任者研修修了レベルの教育内容を日本語及び通訳を介して講義し、実習が行われている。日本より派遣された講師が、来日後には上司、先輩になるので、慣れない日本での生活や仕事へ溶け込む効果が期待できる。当該介護教育施設では、ベッドや車いすなどの福祉機器は日本より持ち込まれ、日本の施設さながらである。

調査対象者は派遣講師との交流の中で日本の文化・習慣も学び、派遣講師も彼らとの交流

によりベトナム文化・習慣を学び、双方向での文化・習慣理解が促進されている。双方向の文化・習慣の理解促進は、SNSの積極的な活用によりベトナムと日本との間で行われていた（小平, 2021）。2008年から始まったEPAによる外国人ケア労働者の受入には、カルチャーブローカー、つまり出身地域・階層の文化との橋渡しをする「文化的媒介者」の必要性を述べており（高畑, 2011）、日本からの派遣講師や派遣講師の日本へ発信するSNSがその役割を果たしている。

以上の特色ある国際労働移動システムにて来日したベトナム人介護技能実習生が、今回の研究対象である。



図1 異文化適応プロセスの三層構造モデル

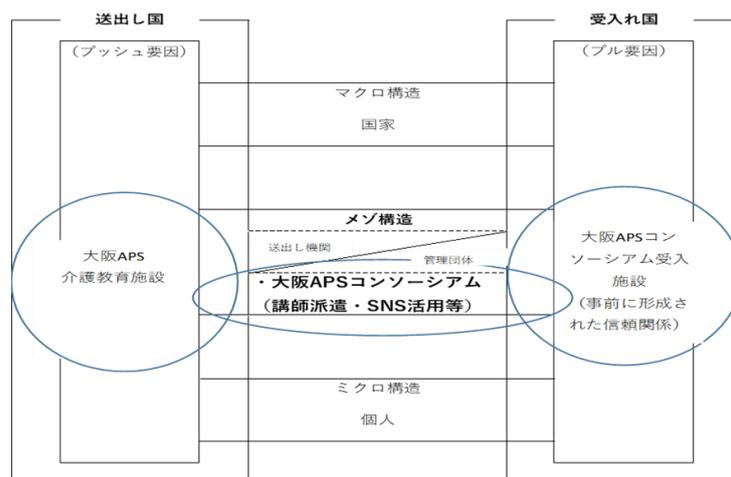


図2 特色ある国際労働移動システム

2. 調査概要

本調査は、第1回目は2020年2月の来日時、第2回目は2021年3月の来日1年目終了時、第3回目は2022年3月の来日2年目終了時、第4回目は2023年1月の来日3年目終了時に実施した。表1に協力者の概要を示した。

今回のインタビューは、職場を通じての実習生への依頼であるため、断りにくい状況であり、また、社会的望ましさの表出が推察される。社会的な望ましさが出ないように、個人が不利益になるインタビュー内容は他言されない旨を説明した。

表1 ベトナム人介護技能実習生概要

ID	実習受入れ施設	性別	最終学歴	母国の看護師資格	入国時日本語能力
A	介護老人保健施設	女性	大学	無	N3
B	介護老人保健施設	女性	医療系短期大学	有	N3
C	介護老人福祉施設	女性	医療系短期大学	有	N3
D	介護老人福祉施設	女性	医療系短期大学	有	N3
E	リハビリテーション病院	女性	医療系短期大学	有	N3
F	リハビリテーション病院	女性	医療系短期大学	有	N4
G	急性期病院	女性	高等教育	無	N3
H	急性期病院	女性	医療系短期大学	有	N3
I	急性期病院	女性	高等学校	無	N2
J	急性期病院	女性	医療系大学	有	N3
K	リハビリテーション病院	女性	医療系短期大学	有	N4
L	リハビリテーション病院	女性	医療系短期大学	有	N4
M	介護老人福祉施設	女性	医療系短期大学	有	N4
N	介護老人福祉施設	女性	医療系大学	有	N4
O	介護老人福祉施設	女性	医療系短期大学	有	N4
P	介護老人福祉施設	女性	大学	無	N3
Q	介護老人福祉施設	女性	医療系大学	有	N4
R	介護老人福祉施設	女性	短期大学	無	N3
S	介護老人福祉施設	女性	医療系短期大学	有	N4

インタビューに協力したのは、19名のベトナム人介護技能実習生であり、全員女性である。技能実習先は、急性期病院が4名(G, H, I, J)、リハビリテーション病院が4名(E, F, K, L)、介護老人保健施設が2名(A, B)、介護老人福祉施設が9名(C, D, M, N, O, P, Q, R, S)であった。最終学歴は大学が2名(A, P)、医療系大学が3名(J, N, Q)、短期大学が1名(R)、医療系短期大学が11名(B, C, D, E, F, H, K, L, M, O, S)、高等学校が2名(G, I)であった。母国の看護師資格保有者は14名(B, C, D, E, F, H, J, K, L, M, N, O, Q, S)であった。来日時の日本語能力は、N2が1名(I)、N3が10名(A, B, C, D, E, G, H, J, P, R)、N4は8名(F, K, L, M, N, O, Q, S)であった。半構造化インタビュー法にて、一人あたり30分程度のデプスインタビューを実施した。質問内容は以下の通りである。

- ・日本の生活で大変なこと、困っていることはありますか。あれば、聞かせてください。
- ・仕事で大変なこと、困っていることはありますか。あれば、聞かせてください。
- ・仕事で嬉しかったこと、楽しかったことはありますか。あれば、聞かせてください。
- ・将来の夢、目標はありますか。あれば、聞かせてください。

第1回目は直接面談にて、第2回目以降はテレビ電話にて実施した。そして、上記のインタビュー結果を心理的適応（心の健康・生存条件・衣食住）、社会文化的適応（対人関係・文化学習・職場環境）、自己実現的適応（充実感）にカテゴライズした。

3. 倫理的な配慮

倫理的配慮として、本コンソーシアムの責任者に対し、事前に文書で調査協力を依頼し、承諾を得たうえで実施した。調査対象者には、口頭で研究趣旨を説明し、協力は任意であること、個人や施設が特定されないこと、調査結果を公表することを明示し、研究協力を得た。本調査は、富山短期大学倫理審査委員会（R3-8）の承認を得て実施した。

4. 結果

4.1. 心理的適応

来日直後から来日3年目終了時までの発言を表2にまとめた。

表2 ベトナム人介護技能実習生の「心理的適応」に関する発言内容

	発言内容
【来日直後】	<ul style="list-style-type: none"> ・今、寂しいです。(A,B,D,E,F,H,J,N,PR) ・寂しいので、週に2、3回ぐらい家族と2時間ぐらい話します。(A,B,C,D,F,G,J,K,N,Q,R) ・コロナウイルスが心配です。両親はコロナウイルスについて心配しています。(G,J,K) ・一番嬉しかったことは関西空港に降りた時先生たちが迎えに来てくれたことです。とても感動しました。(F,K,N,PQ) ・日本に来たばかりの時は少し家族と離れますから寂しかったですが、先生と寮母さんのおかげで寂しくありません。寮母さんは日本のお母さんです。寮母さんはいつも優しくしてくれます。寮母さんのおにぎりや太巻き作りが美味しかったです。(B,M,O,P) ・先輩がいて安心しています。(I,J,L) ・家族はいつも応援をしてくれますので、大丈夫です。(F)
【来日1年目終了時】	<ul style="list-style-type: none"> ・新型コロナウイルスが心配です。(A,E,F,L,N,O) ・寂しいです。(D,J,R) ・日本に慣れました。日本の生活が楽しいです。安心して生活をしています。(A,B,C,D,E,F,G,I,J,K,M,N,O,P) ・お風呂とトイレがあり、プライバシーがあります。便利です。日本で住んでいることは気分がいいです。日本人は親切な人面白い人が沢山います。日本の生活は楽しいです。(B)
【来日2年目終了時】	<ul style="list-style-type: none"> ・仕事にも生活も慣れました。日本の生活は100点です。綺麗な美しい場所が沢山あります。スーパーなど買い物に行くともあります。とても便利です。(E) ・この2年は短く感じます。2年間はあっという間に終わっちゃいました。(O) ・日本生活はめっちゃ満足です。日本の生活で困っていることはありません。(S)
【来日3年目終了時】	なし

来日直後の心理的適応からみてみたい。程度差はあるものの“寂しさ”“不安”“心配”を訴える実習生は10名(A,B,D,E,F,H,J,N,P,R)いた。彼らの来日した2020年2月はちょうど日本国内にて新型コロナウイルスが蔓延しだした頃で、新型コロナウイルスに関して心配する技能実習生が3名(G,J,K)いた。“寂しさ”の解消のため11名(A,B,C,D,F,G,J,K,N,Q,R)が毎日家族とテレビ電話をしていた。一方で、「先生たちが関西空港まで迎えに来てくれて嬉しい。」という回答は5名(F,K,N,P,Q)いた。小平(2021)も第1陣の介護技能実習生たちのインタビューより関西空港までの出迎えに対する喜びについて述べている。そして、13名が寮母のいる研修所に滞在していたが、「寮母さんのおかげで寂しくありません」「寮母さんは日本のお母さんです」「寮母さんはいつも優しくしてくれます」「寮母さんのおにぎりや太巻き作りが美味しかったです」という寮母さんに対する親しい思いを話した技能実習生が4名(B,M,O,P)いた。また、先輩の存在による安心感を話した技能実習生は3名(I,J,L)いた。

続いて来日1年後の心理的適応からみてみたい。新型コロナウイルスに対して心配する発言をした技能実習生は6名(A,E,F,L,N,O)であった。また“寂しさ”を訴える回答は3名(D,J,R)であった。家族と毎日テレビをするという回答は1名(I)であった。一方で「日本に慣れた」「日本の生活が楽しい」「安心して生活をしている」という回答は14名(A,B,C,D,E,F,G,I,J,K,M,N,O,P)であった。

来日2年目終了時の心理的適応では、「仕事にも生活も慣れました。日本の生活は100点

です。綺麗で美しい場所が沢山あります。スーパーなど買い物に行くと何でもあります。とても便利です。」というEさん、「この2年は短く感じます。2年間はあっという間に終わっちゃいました。」というOさん、「日本生活はめっちゃ満足です。日本の生活で困っていることはありません。」というSさんをはじめとして、すべての技能実習生は日本の生活に慣れていて、心理的適応が果たされていた。

来日3年目終了時においては、心理的適応に該当する発言はなかった。

4.2. 社会文化的適応

来日直後から来日3年目終了時までの発言を表3にまとめた。

表3 ベトナム人介護技能実習生の「社会文化的適応」に関する発言内容

	発言内容
【来日直後】	<ul style="list-style-type: none"> ・日本語がまだ上手でないので心配で不安です。日本語が得意ではないのでコミュニケーションがちょっと困ります。今、私は日本語がまだ上手ではありません。日本人の話すスピードは速いのでちょっと聞き取れません。利用者の発音を聞くことができます。私は心配します。大阪介がちょっと心配です。(A,B,C,D,H,J,K,M,N,Q,R) ・先生や職員が手伝ってくれたり、助けてくれたり、教えてくれるから安心です。(A,B,C,F,H,I,L,O,P,Q,S) ・先生たちと皆さんと入国セレモニーに参加してとても楽しかったです。(F,H,K,L,M) ・毎日介護を練習すること、日本語を勉強することが楽しいです。日本の文化を勉強したり、日本人の仕事のやり方を学んだりしたいです。(E)
【来日1年目終了時】	<ul style="list-style-type: none"> ・申し送りのスピードが速いです。分からない場合はもう一度スタッフに聞きます。利用者さんの大阪介の発音が難しいです。(A,B,F,M,N,R,J,K,L,P) ・日本語が下手なので、困っています。私は自分の日本語に自信をもっていません。(A,B,M,N) ・皆さんは優しいです。・職場のスタッフは熱心です。・みなさん、親切です。(A,B,C,E,F,G,I,J,K,L,M,N,O,P,R,S) ・日本人スタッフには優しい人とそうでない人がいますが、私は大丈夫です。私が間違った時は叱りますが、普通の時は笑顔です。楽しく日本人スタッフと話しています。(G) ・日本人のスタッフは優しい人も厳しい人もいます。(P) ・この前一緒に働いている副主任に日本語を教えてくださいましたが、とても優しく分かりやすいです。(I) ・利用者と一緒に話します。私も楽しいです。利用者さんがふるさと、日本の料理など沢山教えてくださいます。(F) ・自分の介護技術に自信がありません。利用者さんは皮膚が弱いです。皮下出血が多いです。自分の移乗介助が心配です。自分の介護技術が不安ですが、自分のできることが増えて良かったです。(B,D,O) ・ちょっと少ししんどいので、自分に頑張れと言います。お風呂介助で汗が出るので少ししんどいです。(D)
【来日2年目終了時】	<ul style="list-style-type: none"> ・介護の仕事は好きです。(A,B,E,G,K,L,M,P,R,S) ・楽しいことは仕事では利用者さんとゲームを行う時です。今はしりとりをしています。日本語の勉強になります。しりとりをすると日本語の勉強になりました。あまり話さない利用者さんとはしりとりでは話します。(A) ・患者さんと話すことが楽しいです。沢山いろいろ教えていただきます。漢字とか患者さんのふるさと日本の果物など教えてくださいます。見守りの時、患者さんと話します。(F) ・介護の仕事は好きです。患者さんはみんなさん可愛いです。介護の仕事にやりがいがあります。患者さんは皆さん「ありがとう。」と言ってきて嬉しいです。介助の時、話すことが楽しいです。自分の家族、患者さんの家族、患者さんの昔の仕事など何でも話します。(K) ・時々利用者さんは自宅に帰ると寂しいです。(A) ・利用者さんと毎日会いますが、利用者が亡くなることがあるので寂しいです。昨日話して笑っていた利用者が今日亡くなりました。おじいちゃん、おばあちゃんが好きなので悲しいです。(B) ・月曜日から金曜日までは仕事で利用者さんに会えるので嬉しいですが、土日は利用者さんに会えないから寂しいです。(R) ・スタッフで挨拶しない人が今もいますが、大丈夫です。あまり話していない人です。多くのスタッフは優しいです。(C) ・優しい利用者さんはいますが、一人だけです。多分利用者さんは外国人が好きではないと思います。(A) ・日本人スタッフはいつも親切で優しいです。(A,B,D,E,F,G,I,K,M,N,P,Q,R) ・APSの先生がいるので困った時相談しやすいです。嬉しいです。安心しています。(A,B,D,S) ・利用者さんの関西弁は難しいです。(E) ・認知症の人が多く大変ですが、看護師さんに報告します。認知症対応は難しいです。病棟には認知症の人が沢山います。大変ですが頑張ります。(F,H,PS) ・腰は少し痛いでコルセットしています。利用者さんが重いです。腰が少し痛いです。痛い時もあります。(C,D,E,H,N,P,R) ・エンゼルがめっちゃ怖いです。4回5回入りました。まだ全然なれません。化粧をしたり身体を綺麗にしたりします。怖いです。なかなか寝れません。入院したばかりで顔が分からない人なので怖いです。(J) ・エンゼルの時は嫌いです。エンゼルは沢山しました。エンゼルは怖いです。ベトナムにはエンゼルはありません。初めてエンゼルに入った時驚きました。ベトナムでは特別サービスになります。(L) ・PCでケース入力をしています。ケース入力では最初は利用者さんの体調、対応すること、利用者さんの使うもの歩行器とか注意点、皮膚とか体の状態、排泄、オムツ、食事、むせ、トロミ、人によってやっていることを書いています。皆さん後から直してくれますので、またそれを見て勉強します。(P,Q,R,S)
【来日3年目終了時】	なし

来日直後の社会文化的適応からみてみたい。自分の日本語能力に対する不安について語った技能実習生は11名(A, B, C, D, H, J, K, M, N, Q, R)いた。一方で、「先生や職員が手伝ってくれたり、助けてくれたり、教えてくれるから安心。」という回答は11名(A, B, C, F, H, I, L, O, P, Q, S)いた。また、来日時の受入れ法人主催の入国セレモニーに対する嬉しさを話す技能実習生が5名(F, H, K, L, M)いた。

次に1年目の社会文化的適応からみてみたい。方言を含む日本語に不安を抱えている技能実習生は4名(A, B, M, N)であった。朝の申し送りの理解度50%前後が4名(A, B, F, M,)、理解度60%前後が2名(N, R)、理解度70%前後が4名(J, K, L, P)、理解度80%前後が2名(H, Q)、理解度90%前後が1名(O)であった。職場の環境として日本人スタッフの技能実習指導を「優しい」「熱心だ」「親切だ」という回答は16名(A, B, C, E, F, G, I, J, K, L, M, N, O, P, R, S)であった。その他日本人スタッフについてGさんからは、「日本人スタッフには優しい人とそうでない人がいますが、私は大丈夫です。私が間違った時は叱りますが、普通の時は笑顔です。楽しく日本人スタッフと話しています。」、Pさんからは、「日本人のスタッフは優しい人も厳しい人もいます。」という発言があった。また対人関係としてスタッフとの関係性においてIさんより「この前一緒に働いている副主任に日本語を教えてもらいましたが、とても優しくて分かりやすいです。」という発言や、利用者との関係性においてFさんから「利用者と毎日一緒に話します。私も楽しいです。利用者さんがふるさと、日本の料理など沢山教えてください。」という発言があった。また、自分の介護技術に対する不安や仕事の大変さについて話した技能実習生は3名(B, D, O)いた。

次に3年目の社会文化的適応について見てみたい。技能実習生より多くの語りがあった。「介護の仕事は好きです」というAさんをはじめとして介護業務を好意的に捉えている技能実習生は9名(B, E, G, K, L, M, P, R, S)いた。また、「楽しいことは仕事では利用者さんとゲームを行う時です。今はしりとりをしています。日本語の勉強になります。しりとりをすると日本語の勉強になりました。あまり話さない利用者さんはしりとりでは話します。」というAさん、「患者さんと話すことが楽しいです。沢山いろいろ教えていただきます。漢字とか患者さんのふるさと日本の果物など教えてください。見守りの時、患者さんと話します。」というFさん、「介護の仕事は好きです。患者さんはみんなさん可愛いです。介護の仕事にやりがいがあります。患者さんは皆さん『ありがとう』と言ってくれて嬉しいです。介助の時、話すことが楽しいです。自分の家族、患者さんの家族、患者さんの昔の仕事など何でも話します。」というKさんなど利用者、患者との良好なやりとりについて語る技能実習生や「時々利用者さんは自宅に帰ると寂しいです。」というAさん、「利用者さんと毎日会いますが、利用者が亡くなることがあるので寂しいです。昨日、話して笑っていた利用者さんが今日亡くなりました。おじいちゃん、おばあちゃんが好きなので悲しいです。」というBさん、「月曜日から金曜日までは仕事で利用者さんに会えるので嬉しいですが、土日は利用者さんに会えないから寂しいです。」というRさんなど利用者・患者に対して家族的感情を抱く

ケースも見られた。

一方で、「挨拶しない人が今もいますが、大丈夫です。あまり話していない人です。多くのスタッフは優しいです。」という C さんからの発言もあった。また、「厳しい利用者さんはいませんが、一人だけです。多分利用者さんは外国人が好きではない。」という A さんの発言もあった。

職場環境では、「日本人スタッフはいつも親切で優しいです。」という E さんをはじめ日本人スタッフの優しさについて話す技能実習生は 12 名 (A, B, D, F, G, I, K, M, N, P, Q, R) いた。その中でも 4 名 (A, B, D, S) がハノイでの介護教育の講師が職場の上司なので相談のしやすさ安心さについて語っていた。

一方では、日本語理解において、E さんより「利用者さんの関西弁は難しいです」という発言があったが、その他の技能実習生は慣れてきたようであった。

また、この頃になると介護業務に対する発言が多く見られた。「認知症の人が多くて大変ですが、看護師さんに報告します。認知症対応は難しいです。病棟には認知症の人が沢山います。大変ですが頑張ります。」という F さんをはじめとして認知症対応の難しさに言及している技能実習生は 3 名 (H, P, S) いた。他には、「腰は少し痛いのでコルセットしています」という C さん、「利用者さんが重いです。腰が少し痛いです。痛い時もあります。」という D さんのように腰痛に苦労している技能実習生が他に 5 名 (E, H, N, P, R) いた。病院勤務においては、「エンゼルがめっちゃ怖いです。4、5 回入りました。まだ全然なれません。化粧をしたり身体を綺麗にしたりします。怖いです。なかなか寝られません。入院したばかりで顔が分からない人なので怖いです。」という発言の J さん、「エンゼルの時は嫌いです。エンゼルは沢山しました。エンゼルは怖いです。ベトナムにはエンゼルはありません。初めてエンゼルに入った時、驚きました。ベトナムでは特別サービスになります。」という L さんが病院特有の業務を受入れられない様子であった。

日本語の習得も進み、日本語能力の向上により、「PC でケース入力をしています。ケース入力では最初は利用者さんの体調、対応すること、利用者さんの使うもの歩行器とか注意点、皮膚とか体の状態、排泄、オムツ、食事、むせ、トロミ、人によってやっていることを書いています。皆さん後から直してくれますので、またそれを見て勉強します。」という発言の S さんをはじめとして他に 3 名 (P, Q, R) がパソコンでの介護記録業務を行っていた。

来日 3 年目終了時においては、社会文化的適応に該当する発言はなかった。

4. 3. 自己実現的適応

来日直後から来日 3 年目終了時までの発言を表 4 にまとめた。

来日直後の自己実現的適応からみてみたい。日本語能力試験 N2 取得希望者は 5 名 (E, J, M, P, Q) いた。日本語能力試験 N1 取得希望者は 4 名 (G, I, K, L) おり、うち 1 名 (I) は日本語能力試験 N2 を来日前に取得している。介護福祉士取得希望者は 7 名 (G, I, J, K, M, N, Q) いた。うち 1 名 (I) は日本語能力試験 N2 を来日前に取得しており介護福祉士取得のための

講座の開講を希望していた。日本での希望滞在期間は3年間で5名(A, B, D, H, R)、5年間で6名(F, J, L, O, P, S)、7年間で1名(G)名、10年間で1名(C)、可能限り長い期間が5名(E, I, K, N, Q)いた。その他個々の将来の希望キャリアとして、Aさんは「ベトナムに帰って老人ホームを作りたいです。」、Bさんは「ベトナムに帰ってベトナムの老人ホームで働きたいです。ベトナムで薬局を開きたい。」、Fさんは「ベトナムに帰ったら日本人の働き方を教えてあげたいです。介護の先生になりたいです。」、Rさんは「将来、日本の病院で働くこと、親切的な介護士になることが目標です。」、Sさんは「日本の働き方を勉強して、国に帰ってから老人ホームで働きたいです。」と語った。

表4 ベトナム人介護技能実習生の「自己実現的適応」に関する発言内容

	発言内容
【来日直後】	<ul style="list-style-type: none"> ・N2を取りたいです。N2を今年の12月に取りたいです。(E, J, M, P, Q) ・介護福祉士の資格を取りたいです。(G, I, J, K, M, N, Q) ・N1まで取得したい。(G, I, K, L) ・介護福祉士取得のための講座をしてほしい。(I) ・ベトナムに帰って老人ホームを作りたいです。(A) ・ベトナムに帰ってベトナムの老人ホームで働きたいです。ベトナムで薬局を開きたい。(B) ・ベトナムに帰ったら日本人の働き方を教えてあげたいです。介護の先生になりたいです。(F) ・将来、日本の病院で働くこと親切的な介護士になることが目標です。(R) ・日本の働き方を勉強して国に帰ってから老人ホームで働きたいです。(S)
【来日1年目終了時】	<ul style="list-style-type: none"> ・N2を取りたいです。(A, B, C, D, E, F, H, J, K, L, M, N, O, P, Q, R, S) ・N1を取得したい。(G, H, I, L) ・介護福祉士の資格を取りたいです。(A, B, C, D, E, F, G, H, J, K, L, M, N, O, P, Q, R, S) ・2年後留学生として介護を学びたいです。いろいろ学びたいです。介護分野で留学したいです。施設の奨学金の話を見ました。できれば日本の介護をしっかり勉強したら、帰国後役に立つと思います。(O) 【介護の仕事に対する充実感】(A, C, D, F, H, J, L, O, P, Q, R, S) ・介護の仕事はいいことです。私は高齢者が好きです。利用者さんはおじいさん、おばあさんのようです。介護の仕事は好きです。利用者さんを手伝うことが嬉しいです。楽しいです。利用者さんが『ありがとう。』と言ってくれます。とても嬉しいです。(A) ・食事介助をする時、すごくかわいい利用者さんがいます。おばあちゃん、おじいちゃん可愛いです。食事介助をしながら利用者さんと話すことが嬉しいです。(C) ・初めてこの仕事をして難しくて大変だと思いましたが、やり方を勉強してだんだん好きになってきました。今は慣れました。介護の仕事は私に合っています。(N) ・介護の仕事は好きだけど、合っているかまだわかりません。毎日毎日利用者さんの幸せな姿を見て私も幸せになります。仕事を上手になりたいです。(R)
【来日2年目終了時】	<ul style="list-style-type: none"> ・利用者さんと今はしりとりをしています。日本語の勉強になります。しりとりをすると日本語の勉強になりました。あまり話さない利用者さんとはしりとりで話します。コミュニケーションを取ります。(A) ・中国語、英語も勉強しています。将来は通訳、ITの仕事に興味があります。できるなら日本で仕事がしたいです。5年間ぐらい日本にいて介護の仕事をするかまだ分かりません。(G) ・今も介護の留学をしたいです。専門学校か短期大学かを考えています。優しい介護士になって毎日利用者さんの笑顔を見たいです。(O) ・介護福祉士の資格を取りたいです。(A, B, C, D, E, F, J, M, N, O, P, S) ・介護福祉士取得の方法を教えてください。またそのサポートもして欲しいです。(I) ・介護福祉士の取得について会社から話はまだありませんが、先生たちから話がありました。3年後ですね。 ・介護福祉士も取りたいですが、勉強の仕方が分かりません。(C) ・会社は希望すると介護福祉士の取り方を教えてください。介護福祉士を取りたい時は「言って」と言われています。(P) ・3年後から介護福祉士の勉強が始まります。技能実習生の3年間が終わってから介護福祉士の勉強が始まります。(S) ・介護福祉士も取りたいですが、勉強の仕方が分かりません。教えてください。(M)
【来日3年目終了時】	<ul style="list-style-type: none"> ・介護福祉士を取得したいです。(A, B, C, D, E, F, J, K, O, P, Q, R, S) ・特定技能にしようと思いましたが、技能実習3号でも後勤ができるから技能実習3号にしました。(A) ・友人と話して、技能実習3号に決めました。10年間、日本にいたいので選びました。(B) ・技能実習3号に決めました。生活もあまり変わらないし、仕事もそのままいけるので決めました。特定技能は自由ですが見えないお金がありますし、仕事も増えるので心配なので技能実習3号にしました。周りに特定技能を選んだ人はいなくて、よく分らないので技能実習3号にしました。給料は最終的に技能実習3号がいいです。(C) ・特定技能に決めました。技能実習は2年間ぐらい働かなきゃならないですが、お父さん、お母さんは年をとっているから、帰国したい時いつでも帰国できます。(N) ・「技能実習3号に決めました。生活もあまり変わらないし、仕事もそのままいけるので決めました。特定技能は自由ですが見えないお金がありますし、仕事も増えるので心配なので技能実習3号にしました。周りに特定技能を選んだ人はいなくて、よく分らないので技能実習3号にしました。給料は最終的に技能実習3号がいいです。(C) ・特定技能に決めました。特定技能だと他の施設にも行けるし、ベトナムに帰りたい時帰ることができるので特定技能を選びました。(O) ・特定技能に決めました。特定技能はベトナムに帰らなくてはならない時、自由に帰ることができるからです。両方も良いところ悪いところがあります。(P) ・特定技能に決めました。私は後勤がやりたいので特定技能を選びました。技能実習では後勤ができません。ベトナムに仕送りしています。(Q) ・特定技能に決めました。長く働けるからです。日本人と同じ働き方になるので制度などいっぱいある。責任ある仕事ができる。ボーナスがある。会社から家賃手当が少しあります。日本ではとりあえず30歳まで働きたいです。そのあとはまた考えます。(S) ・技能実習3号に決めました。皆さん親切に教えてくれたので、ずっと今のところ働きたいです。特定技能は難しいので、まだ上手くないので選びませんでした。(E) ・あと2年間と決めており、家賃の負担もないから技能実習3号にした。(J) ・技能実習3号に決めました。給料がいいからです。家賃も少ないからです。(L)

次に1年目終了時の自己実現的適応を見てみたい。日本語能力試験 N4 にて来日した技能実習生 6 名 (F, M, N, O, Q, S) 全員が日本語能力試験 3 級 (N3) に全員合格した。また、日本語能力試験 N2 取得希望者 17 名 (A, B, C, D, E, F, H, J, K, L, M, N, O, P, Q, R, S) いた。うち C さん、H さん、J さん、P さんは日本語能力試験 N2 を受験し、C さんは合格した。そして、日本語能力試験 N2 取得希望者 17 名のうち日本語能力試験 N2 を受験した C さん、H さん、J さん、P さんを除く 13 名のうち受験日を具体的に決めている技能実習生は 12 名いた。日本語能力試験 N1 取得希望者は 4 名 (G, H, I, L) おり、その中で I さんは日本語能力試験 N1 を受験したが不合格であった。介護福祉士取得希望者は 18 名 (A, B, C, D, E, F, G, H, I, K, L, M, N, O, P, Q, R, S) いた。また、日本で看護師資格の取得を希望している技能実習生は 2 名 (G, I) いた。日本での希望滞在期間は 3 年間で 1 名 (E)、5 年間で 11 名 (A, D, F, G, H, J, K, L, N, Q, S)、8 年間で 1 名 (M)、10 年間で 1 名 (C)、可能限り長い期間が 3 名 (B, I, P,) いた。O さんより「2 年後留学生として介護を学びたいです。いろいろ学びたいです。介護分野で留学したいです。施設の奨学金の話の話を聞きました。できれば日本の介護をしっかりと勉強したら、帰国後役に立つと思います。」という発言があった。仕事に対する充実感を語った技能実習生は 12 名 (A, C, D, F, H, J, L, O, P, Q, R, S) いた。A さんより「介護の仕事はいいことです。私は高齢者が好きです。利用者さんはおじいさん、おばあさんのようです。介護の仕事は好きです。利用者さんを手伝うことが嬉しいです。楽しいです。利用者さんが『ありがとう。』と言ってくれます。とても嬉しいです。」、C さんより「食事介助をする時、すごくかわいい利用者さんがいます。おばあちゃん、おじいちゃんが可愛いです。食事介助をしながら利用者さんと話すことが楽しいです。」、N さんより「初めてこの仕事をして難しくて大変だと思いましたが、やり方を勉強してだんだん好きになってきました。今は慣れました。介護の仕事は私に合っています。」、R さんより「介護の仕事は好きだけど、合っているかまだわかりません。毎日毎日利用者さんの幸せな姿を見て私も幸せになります。仕事を上手になりたいです。」という発言があり、介護の仕事に対するポジティブな姿勢が窺えた。

次に 2 年目終了時の自己実現的適応についての発言について見てみたい。まずは特徴的な発言から捉えたい。「利用者さんと今はしりとりをしています。日本語の勉強になります。しりとりをすると日本語の勉強になりました。あまり話さない利用者さんとはしりとりでは話します。コミュニケーションを取ります。」という A さんの発言より、日本語能力の向上により利用者さんとのコミュニケーションの手段としてしりとりゲームを行っており、そこには仕事への工夫が見られる。と同時にしりとりゲームより日本語能力の向上を図るという面白いケースである。G さんの「中国語、英語も勉強しています。将来は通訳、IT の仕事に興味があります。できるなら日本で仕事がしたいです。5 年間ぐらい日本にいて介護の仕事をするかまだ分かりません。」と介護以外の職業選択の発言があった。O さんは「今も介護の留学をしたいです。専門学校か短期大学かを考えています。優しい介護士になって毎日利用者さんの笑顔を見たいです。」という発言があったが、1 年前のインタビューでも

専門学校または短期大学への進学を希望していた。

介護福祉士の取得を希望する技能実習生は13名(A, B, C, D, E, F, I, J, M, N, O, P, S)いたが、「介護福祉士取得の方法を教えてください。またそのサポートもして欲しいです。(I)」、「介護福祉士の取得について会社から話はまだありませんが、先生たちから話がありました。3年後ですね。(C)」、「介護福祉士も取りたいですが、勉強の仕方が分かりません。(M)」、「会社は希望すると介護福祉士の取り方を教えてください。介護福祉士を取りたい時は『言っ』とされています。(P)」、「3年後から介護福祉士の勉強が始まります。技能実習生の3年間が終わってから介護福祉士の勉強が始まります。(S)」という発言から、受け入れ施設に対して介護福祉士取得のための何らかのサポートを求める声が出ている。

最後に3年目終了時の発言を見てみたい。技能実習制度において、3年間が一つのタームとなっており、日本で継続して次のステップである技能実習3号または特定技能1号(介護)にて働くのか。ベトナムに帰国するのか。キャリア選択が迫られる。それぞれがどのようなキャリア選択をするのか彼らの発言から見てみたい。

まずは、技能実習3号を選択した技能実習生は9名(A, B, C, E, F, I, J, L, R)であった。8名は次のとおりである。「特定技能にしようと思いましたが、技能実習3号でも夜勤ができるから技能実習3号にしました。(A)」、「友人と話して、技能実習3号に決めました。10年間、日本にいたいので選びました。(B)」、「技能実習3号に決めました。生活もあまり変わらないし、仕事もそのままいけるので決めました。特定技能は自由ですが、見えないお金がありますし、仕事も増えるので心配なので技能実習3号にしました。周りに特定技能を選んだ人はいなくて、よく分からないので技能実習3号にしました。給料は最終的に技能実習3号がいいです。(C)」、「技能実習3号に決めました。皆さん親切に教えてくれたので、ずっと今のところで働きたいです。特定技能は難しいので、まだ上手くないので選びませんでした。(E)」、「技能実習3号に決めました。先ずはあと2年間日本にしようと思っている。(I)」、「あと2年間と決めており、家賃の負担もないから技能実習3号にした。(J)」、「技能実習3号に決めました。給料がいいからです。家賃も少ないからです。(L)」、「技能実習3号に決めました。日本で長い間働きたいから、技能実習3号が終わったら特定技能を考えている。(R)」。技能実習制度の目的は、技能、技術又は知識の開発途上国等への移転を図ることであるが、技能実習3号を選択した理由として、誰一人として介護の技能や介護の知識の習得と答える技能実習生はいなかった。

次に特定技能1号(介護)を選択した技能実習生は7名(D, K, N, O, P, Q, S)であった。特定技能1号(介護)の目的は、人材不足への対応が目的で、日本人と同様の就労条件で、転職が自由にできるというものである。特定技能1号(介護)を選択した7名の発言を見てみたい。「特定技能に決めました。日本に何年いるか分かりません。(D)」、「特定技能に決めました。技能実習は2年間ぐらい働かなきゃならないですが、お父さん、お母さんは年をとっているから、帰国したい時いつでも帰国できます。(N)」、「特定技能に決めました。特定技

能だと他の施設にも行けるし、ベトナムに帰りたい時帰ることができるので特定技能を選びました。(O)、「特定技能に決めました。特定技能はベトナムに帰らなくてはならない時、自由に帰ることができるからです。両方とも良いところ悪いところがあります。(P)」、「特定技能に決めました。私は夜勤がやりたいので特定技能を選びました。技能実習では夜勤ができません。ベトナムに仕送りしています。(Q)」、「特定技能に決めました。長く働けるからです。日本人と同じ働き方になるので制度などいっぱいある。責任ある仕事ができる。ボーナスがある。会社から家賃手当が少しあります。日本ではとりあえず 30 歳まで働きたいです。そのあとはまた考えます。(S)」。特定技能 1 号（介護）においても誰一人として介護の技能や介護の知識の習得と答える技能実習生はいなかったが、責任のある仕事に就けることを選択理由とした技能実習生が 1 名いた。その他多くの技能実習生は制度に縛られない働き方、自由度の高い働き方を選択理由にあげている。

技能実習生 3 号、特定技能 1 号（介護）を選択した技能実習生の共通性は、介護福祉士（国家資格）の取得を希望していることである。介護福祉士（国家資格）の取得を希望している技能実習生は、日本に残る技能実習生 16 名のうち 13 名(A, B, C, D, E, F, J, K, O, P, Q, R, S)であった。

帰国を選択した技能実習生は 3 名(G, H, M)であった。G は、このメンバーで唯一、日本語能力試験 N1 を取得した技能実習生で、明確な自分のキャリアプランを持ち、この 3 年間、中国語、英語を学び、IT 資格の取得のため学習に励んでいた。ベトナムに帰国後は、日系の IT 企業働き、再度来日し、日本での IT 企業就職を希望していた。H は帰国後のプランはなく、M は友人と洋服店の経営をするとのことで、3 名とも母国での介護職を希望しなかった。

過去 3 年間質的調査のインタビュー調査と同時に量的調査も行ってきた。その量的調査において介護の仕事に関する質問をした。質問内容は、「介護のお仕事は同じことの繰り返しで退屈である。」という問いに対して、M は 3 年間「思う」と回答していた。

5. 考察

ベトナム人介護技能実習生の日本での生活に対する心理的適応、社会文化的適応、自己実現的適応の状況とその 3 年間の推移を、デプスインタビューを通じて調査してきた。本論では適応ごとの変化を時間軸で追いたい。

心理的適応では、来日時に、“寂しさ” “不安” “心配” を抱えている技能実習生が多く、家族との毎日のテレビ電話での励ましや安らぎといった精神的なサポートを受けており、来日時直ちに Wi-Fi が使用できる環境が必要だと考える。藤野 (2019) もベトナム人 EPA 介護福祉士候補者の受入においてベトナム人の伝統的な家族の支え合いについて述べており、家族と自由に話せる Wi-Fi 設備の完備の必要性を論じている。同じく、前田 (2018) もフィリピン人技能実習生における家族からの心理的なサポートを得やすい環境づくりについて論じている。

また、ハノイでの介護教育の講師と再会したことで安心感を得た技能実習生も存在し、本コンソーシアムの特色ある国際労働移動システムによるものと考えられる。入国後研修中での寮母との交流や、先に来日した先輩技能実習生の存在も安心感に繋がっていた。

1年目終了時には“寂しさ”や“不安”“心配”を訴える回答は大幅に減少し、日本の生活に対して「楽しい」、「安心」、「慣れた」という回答が多くを占めた。このことから来日1年目には、ほとんどの技能実習生は精神的安定性が保たれた心理的適応を達成したと思われる。しかしながら、新型コロナウイルスの予防接種前でもあり、新型コロナウイルスの感染に不安を感じている技能実習生もいた。

来日2年目終了時においては、全員が来日時より日本語能力の向上が見られた。中には流ちょうに日本語話す技能実習生もおり、積極的に日本人スタッフに話しかけているとのことであった。また、全員が日本の生活に慣れて心理的適応は達成されていた。

畠中他(2014)は、異文化接触への態度の違いが、適応の様相を分けていく一因になる可能性を指摘している。今回対象となっている技能実習生は、来日前に日本人介護士による介護教育を受け、日本の生活文化や職場文化にも触れる機会得ることができ、日本人介護士を通して日本を理解することができた。これらの体験、経験が異文化への接触であり、来日早々の心理的適応に繋がったと推察する。

社会文化的適応では、来日時、多くの技能実習生はN3を取得しているが、日本語能力に対する不安を持っていた。また、ハノイの介護教育の講師が職場の上司、先輩として実習先にいるにも拘らず、実習先配属前の段階では、配属先での“不安”、“寂しさ”、“心配”を訴える技能実習生がいた。

一方で、受入れ法人主催の歓迎会に喜びを感じる技能実習生がいた。組織社会化という観点から見ると非常に重要である。組織社会化とは、「組織への新規参入者が、新たな役割・規範・価値を習得するという形で変化し、組織に適応していく過程」である(Wanous, 1992)。1年目終了時では、全員が日本語能力試験N3に合格した。その要因は本人たちの努力もあるが、職場の職員による日本語指導にもあると考えられる。日本人スタッフによる毎日の日本語教育が技能実習生の日本語能力に対する不安の減少と職場での人間関係構築に寄与していると考えられる。

介護技能実習生の入国要件である日本語能力試験N4程度を満たしているにも関わらず、日本語に不安を抱えている技能実習生がいることを受入施設は理解すると同時に、彼らの不安を解消させるためにも受入施設での継続した日本語教育の大切さを感じる。

また、職場環境において日本人スタッフの技能実習生に対する態度を好意的に受けと止めている回答が16名と多く、技能実習生とベトナムに派遣された日本人スタッフとの良好な関係性が他の日本人スタッフにも発展したと推察する。そして良好な関係性は日本人スタッフのみならず利用者等とも構築されていた。

一方で、自分の介護技術に対する不安を訴える技能実習生が存在するが、介護技術の向上

意欲の高さと捉えることもできるので、その不安な気持ちを解消し、自信につながる取り組みが技能実習現場にて求められる。また、朝の申し送りにおいて理解度が 50%前後の技能実習生が存在し、自分の日本語能力に不安を感じており、日本人スタッフの朝の申し送り時における話すスピードや表現の工夫も必要だと思われる。

来日 2 年目終了時でのインタビューでは、全員が来日時より日本語能力の向上が見られた。日本語を流暢に話す技能実習生もおり、積極的に日本人スタッフに話しかけているとのことであった。

ベトナム人介護技能実習生が日本語で自分の思いや考えを話すことができるようになり、職場や仕事に関する社会文化的適応に関する内容が多かった。多くの技能講習生は、介護業務を好意的に捉えていた。日本人スタッフとの関係性も概ね良好で、日本人スタッフの受け入れる姿勢を感じる。また、ベトナムで介護教育を行った職場の上司の存在は大きく、悩み事や相談ができる関係性にあり、心理的適応の重要な要素であった。一方で、挨拶をしない日本人スタッフも存在している。ベトナム人介護技能実習生は、「外国人だからあいさつをしてくれない」という外国人差別ととらえている。受け入れ側施設には、外国人差別の加害者となっている事実を報告し、差別を起こさない体制づくりが必須である。また、外国人を受け入れる組織の日本人スタッフには、社会人として基本的なあいさつの徹底が求められる。

多くの利用者はベトナム人介護技能実習生を好意的に受け入れており、利用者と積極的に関わる姿や、深い親近感をもつケースもあった。一方で、彼らに対して好意的でない利用者、患者も一部存在しており、日本人スタッフによる利用者・患者教育と技能実習生へのフォローが必要である。

注意すべき点として、腰痛に悩む技能実習生が 7 名存在いた。腰痛は介護職にとって職業病であり、離職の原因になることもある。また、病院でのエンゼルケアに対して抵抗感が強く、メンタルヘルスに深い影響を与えていると思われるので、エンゼルケアに対する心のケアも必要だと思われる。

次に、自己実現的適応について見てみたい。来日直後より、日本語能力 N2、N1 の取得といった日本語能力の向上を目指す技能実習生が多く存在するが、他の技能実習の職種と異なり日本語能力が求められるからだと思われる。また、来日時に既に日本語能力試験 N2 を取得している技能実習生が 1 名いるが、更なるレベルアップを目指して日本語能力試験 N1 取得を目指している。そして、国家資格である介護福祉士の資格取得にも言及し、そのための講座の開講を受入れ法人に求めており、意欲の高さが窺える。また、介護福祉士資格取得希望者は他にも存在しており、同様に意欲の高さが窺える。

来日間もない段階で日本の“介護福祉士”という国家資格を認識し、取得まで考えられるのは、ベトナムにて日本人派遣講師の影響が十分に考えられ、本件の特色ある国際労働力移動システムは自己実現的適応にも作用していることが判明した。

来日 2 年目終了時の自己実現的適応について見てみたい。技能実習生が利用者より日本語や日本語の文法を教えてもらい、利用者とのしりとりゲームで楽しみながら日本語を学ぶケースがあった。そこには、仕事における日本語能力を生かした創意と工夫が見られる。しりとりゲームは、認知症患者の認知症の進行を遅らせる認知機能維持・改善効果があることも報告されており（杉山他 2020）、利用者にとってもプラスの効果があり、双方にとってメリットがある。

介護福祉士取得を目指す技能実習生は多く、なんらかのサポートを希望しているが、受け入れ施設側は現段階ではその必要性を感じていない。または、その要望を把握していないようで、そこに技能実習生と受け入れ施設のギャップを感じる。彼らは特色ある国際労働移動システムにて来日し、早い段階で心理的適応及び社会文化的適応を果たしていることを考えると、彼らの介護福祉士取得の意欲に受け入れ施設が応える必要がある。また、1名であるが 2 年間にわたり、介護系の専門学校または短大への進学を希望している技能実習生も存在し、職場に相談をしているとのことで、キャリアパスの提示など受け入れ施設のキャリア開発支援が求められる。

技能実習生として介護の技能と知識を学んでいるが、自己啓発として介護とは関係のない中国語や英語を学んだり、IT 系の資格取得に励んだり、将来的には通訳を目指す技能実習生も存在しており、技能実習を母国への介護技術・技能移転ではなく、キャリア形成の手段として活用しているケースもあった。介護技能実習は開始して間もないが、他の職種と同様に“目的と実態の乖離”である。そのことは、送出し国であるベトナム側も十分認識しており、日本政府に対して、不満や疑念を抱いている。日本政府は“実態”を直視し、自国の介護人材不足だけに目を向けるのではなく、技能実習生を中心に見据える必要がある。そして、彼らの主体的なキャリア形成という視点を日本側は理解し、尊重する必要がある。そうなると、技能実習制度の見直し、廃止という方向に向かうことが妥当である。介護におけるポイントは、在留期限を取っ払い、技能実習生が継続的にキャリア形成ができるように二国間を循環できる仕組みだと考える。

最後に来日 3 年目終了時の自己実現的適応について考察をする。来日 3 年目の終了時には日本の生活、職場環境、介護業務にも慣れ、それぞれの 3 年目のキャリア選択について語ってくれた。

技能実習 3 号を選んだ理由として、介護の技能・技術の向上という内発的動機づけよりも金銭面や労働条件に関する外発的動機づけにてキャリア選択をしたことが明らかになった。

一方、特定技能 1 号（介護）を選択した理由は、日本人と同条件での勤務条件に魅力を感じ、自由に職場移動が可能で束縛されない自由度の高い働き方にあり、こちらも内発的動機づけよりも外発的動機づけによるものであった。ただ、1 名のみ“責任のある仕事ができる”ことにも魅力を感じていた。

技能実習 3 号を選んだ理由と特定技能 1 号（介護）を選んだ理由は共に外発的動機づけ

によるものが多かったが、技能実習生は介護業務をネガティブに捉えていると判断してよいのであろうか。彼らは、介護福祉士資格の取得を希望しており、学ぶ意欲は高い。見方として、3年目終了時点で現場での介護業務に対して、魅力を感じていないと受け止めることもできる。食事介助、排泄介助、入浴介助のみだと、わざわざ日本に来なくてもどの国でもできることであり、日本に来たからこそ学べる「自立支援介護」を技能実習のカリキュラムに積極的に取り入れ、日本人介護士の「自立支援介護」の指導力が求められる。

3人の帰国者のキャリア選択を見ると、介護職を希望しておらず、現段階では“介護の技能・技術移転”が図られないことが判明したが、ベトナムは家族介護であり、老人ホームはハノイやホーチミンなどの都市部にあるのみである。そして、その数はまだ少ない。ましてや、技能実習生の多くは地方出身者であり、帰国しても出身地に老人ホームはなく、現時点では介護の技術・技能移転は難しい。

帰国希望者の中には、自分の目標を決めてそれに向けて3年間取り組んできたケースもあり、技能実習生を収入目的のみで来日しているという認識で捉えるのではなく、ひとりひとりが多様性のあるキャリアを目指す個人であるといことを日本側は理解する必要がある。

6. 結論

本稿の目的は、ベトナム人介護技能実習生の聴き取りから、三層構造モデルによる異文化適応から彼らのキャリア展望を明らかにすることであった。畠中他(2014)は、下層の心理的適応を原点として、社会文化的適応の段階に進み、最後に自己実現的適応に到達すると論じていたが、この3年間の彼らへのインタビュー調査を通じて、来日時より精神的適応、社会文化的適応、自己実現的適応が同時に示され、来日1年目終了後において、さらに自己実現的適応性が高まっていた。したがって、今回のケースでは、三層構造モデルは現実と乖離しており、その理論的妥当性を満たしていないことがわかる。その理由は特色ある国際労働移動システムにある。つまり、ベトナム人介護技能実習生が来日前に精神的適応、社会文化的適応、自己実現的適応のための素地を身につけており、技能実習先である受入施設に円滑な移行を果たすことができたためであると考えられる。三層構造モデルが想定する適応の時間的進行に代わる新たなモデルが必要である。

一方で、技能実習生は来日時より介護福祉士取得のためのサポートを希望していたが、受入側3法人はともにサポートの必要性をあまり感じておらず、実習生と受入組織との間に著しいギャップがある。そのギャップを解消しなければ、技能実習生に選ばれる職場とはならず、近い将来に激しい人材枯渇に直面することが予想される。来日前に、現地ベトナムで日本側より介護福祉士資格の取得等のためのキャリアパスの明示を行うことが、彼らのモチベーションアップに繋がり、早期に自己実現的適応に到達するのではないかと推察する。また、日本での滞在期間が有限であるため、介護福祉士取得希望者に対しては来日早期より、介護福祉士取得に繋がるサポートや定期的なキャリアカウンセリングを実施することで、モチベーション維持につながるだろう。

金（2010）は、インドネシアのEPA介護福祉士候補者のケースとして、介護福祉士国家試験対策研修を受けていると国家資格に対する意識が高まることを論じており、介護福祉士の取得へのサポートを期待したい。技能実習生の能力向上は、受入れ法人にとっても利用者サービスの向上につながる。今後ますます、日本人の介護人材確保が困難となり、外国人介護士のサポートが必要になる。今後、介護福祉士資格を保有した外国人介護士の活躍が求められる。

介護福祉士取得を希望する技能実習生がいる一方で、技能実習3号を選択した理由が収入増加、経費負担の軽減、労働の負荷、自信のなさであることを踏まえると、来日当時は、介護技能実習に対して期待していた彼らだが、現在の介護業務に対して魅力を感じていないと受け止めることができるのではないかと懸念される。食事介助、排泄介助、入浴介助のみだと、わざわざ日本に来なくてもどの国でもできることであり、日本に来たからこそ学べる「自立支援介護」を技能実習のカリキュラムに積極的に取り入れることが重要である。具体的には、「介護過程」の展開である。「利用者の生活状態を知る」、「利用者の課題を明確にする」、「介護計画の立案」、「介護の実践と評価」、「評価後の改善」、つまり、介護業界のPDCAサイクルである。日本人介護士の「自立支援介護」の教育力が強く求められる。

最後に本研究結果より、今回の研究対象の技能実習生は来日前に、実習先の上司、先輩との人間関係を構築し、彼らを通して日本の生活文化、職場文化を理解の上、来日した。結果として、心理的適応、社会文化的適応、自己実現的適用の素地を身に付けて、来日し、日本社会への円滑な移行を果たした。これらの事実より、「異文化適応同時進行型モデル」(図3)を見出した。

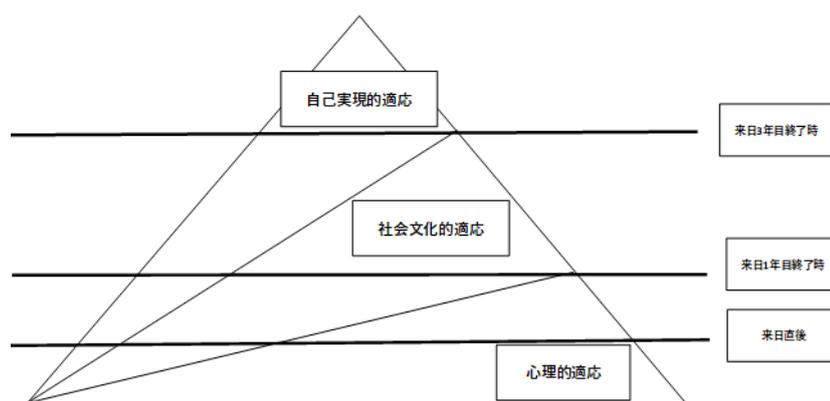


図3 異文化適応同時進行型モデル

7. 本研究の限界と今後の課題

本研究の限界について2点を解説したい。第一は調査対象者の特殊性である。本調査対象者は特色ある国際労働移動システムにて来日しており、一般的な来日の仕方とは異なり、一般化できるものではない。第二は調査対象者の社会的のぞましさである。本研究の調査対象

者は、協力法人からの紹介を受けており、好意的に見られる発言の可能性があり、法人に対する不平、不満についての発言は避けられた可能性もある。そのため、本研究が明らかにした結論は全国のベトナム人介護技能実習生に適用できるかは不明である。

付記 本論文は、立命館大学大学院人間科学研究科の博士論文（2024）の一部改変に基づくものである。

本研究は、令和5年度公益財団法人富山第一銀行奨学財団研究助成金を受けております。

【引用文献】

- Aycan, Z. (1997). Expatriate adjustment as a multifaceted phenomenon: Individual and organizational level predictors. *International Journal of Human Resource Management*, 8(4), 434-456. <https://doi.org/10.1080/095851997341540>
- Black, J. S., & Maendenhall, M. (1990). Cross – cultural training effectiveness: A review and a theoretical framework for future research. *Academy of Management Review*, 15(1), 113-136.
- Dunbar, E. (1994) The German executive in the U.S Work and Social Environment: Exploring Role Demands. *International Journal of Relations*, 18, 277-291.
- Masgoret, A., Bernaus, M., & Gardner, R. C. (2000). A study of cross-cultural adaptation by English – speaking sojourners in Spain. *Foreign Language Annals*, 33(5), 548-558. <https://doi.org/10.1111/j.1944-9720.2000.tb01998.x>
- Masgoret, A.-M. (2006). Examining the role of language attitudes and motivation on the sociocultural adjustment and the job performance of sojourners in Spain. *International Journal of Intercultural Relations*, 30(3), 311-331. <https://doi.org/10.1016/j.ijintrel.2005.08.004>
- Searle, W., & Ward, C. (1990). The prediction of psychological and sociocultural adjustment during cross-cultural transitions. *International Journal of Intercultural Relations*, 14(4), 449-464. [https://doi.org/10.1016/0147-1767\(90\)90030-Z](https://doi.org/10.1016/0147-1767(90)90030-Z)
- Wanous, P.J.(1992).Organizational entry: recruitment , selection, orientation, ,and socialization of newcomers, Addison Wesley Pub .Co.
- Ward, C.,& Kennedy, A. (1993). Where’s the “culture” in cross – cultural transition?. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 24(2), 221-249.
- 金 美辰 2010. E P Aによりインドネシアから来日した介護福祉士候補者の研修と介護福祉士国家資格取得への意識. 大妻女子大学人間関係学部紀要 人間関係研究 12 : 37-44.
- 小平達夫 2021. 介護技能実習制度に伴う外国人ケア労働者の日本社会への流入. 富山大学

- 大学院人文社会科学部研究科修理論文:25-28.
- 杉山弘晃・中村賢治・原田欣宏・大口達也・堀口美奈子・佐川祥吾, 2020. 「認知症患者を対象とした対話エージェントとのしりとりゲームによる認知機能維持効果の検証」 第34回人工知能学会全国大会論文集. p1-4.
- 高畑 幸 2011. 外国人ケア労働者をケアするのは誰か—経済連携協定より受け入れたフィリピン人介護士候補者をめぐって—. 社会分析 38号:43-60.
- 田中共子, 松尾馨. 1993. 異文化欲求不満における反応類型と事例分析: 異文化間インターメディアターの役割と示唆. 広島大学留学センター紀要. 4, 81-100.
- 畠中かおり・田中京子・光吉仁哉. 2014. 在日外国人介護士候補者の異文化適応—三層構造モデルに基づく縦断的事例の分析—. 岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要 37 巻: 67-75.
- 平野 裕子・小川 玲子・川口 貞親・大野 俊, 2010. 「2国間経済連携協定に基づくインドネシア人看護師候補者導入に関する研究」 看護管理, 20, 509-515.
- 藤野達也 2019. 「EPA介護福祉士候補者受入れの現状と課題—国家試験受験前の帰国理由からの分析—」. 淑徳大学研究紀要. 53 巻: 153-163.
- 古川恵美・瀬戸加奈子・松本邦愛・長谷川友紀, 2012. 「経済連携協定 (EPA) に基づく外国人看護師候補者受け入れ施設の現状と課題」. 日本医療マネジメント学会雑誌, 12 (4), 255-260, 2012.
- 前田健次 2018. フィリピン人技能実習生のメンタルヘルスに関連するリスク要因: 文化変容方略に着目して. Journal of International Health Vol. 33 No4:303-312.